

<株式会社エフエム東京 第 528 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 8 年 5 月 12 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 11 階大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（4 名）

佐々木 俊尚 委員長代理  
松田 紀子 委員  
山口 真由 委員  
福里 真一 委員

◇欠席委員（2 名）

ロバート キャンベル 委員長  
柴崎 友香 委員

◇社側出席者（5 名）

内藤 博志 取締役執行役員コンテンツ事業局長  
宮野 潤一 執行役員総合プロデュース局長  
砂井 博文 総合プロデュース局コンテンツ・プロデュース部長  
西森 郁馬 総合プロデュース局業務管理部長  
小林 弘幸 総合プロデュース局コンテンツ・プロデュース部プロデューサー

◇社側欠席者（1 名）

唐島 夏生 代表取締役社長執行役員

**【事務担当 宮野放送番組審議会事務局長】**

4. 議題：番組試聴（55 分）  
『川島明そもそもの話』  
2026 年 4 月 11 日（土） 17:00～17:55 TOKYO FM/JFN37 局ネット

＜議事内容＞

議題 1：最近の活動について

■『閃光ライオット』における応募数の公表に関するご報告とお詫び

当社が株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント SD・RED グループと共催してまいりました 10 代限定 夏の音楽フェスティバル『閃光ライオット』において、応募数に関する調査を行った結果、実際の応募数を上回る数値を公表していたことが判明いたしました。具体的には、2023 年は公表数 3,674 組に対し実数 1,174 組、2024 年は公表数 3,078 組に対し実数 578 組、2025 年は公表数 3,371 組に対し実数 790 組であることを確認しております。

本件を 4 月 17 日に当社および株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント社のホームページにてご報告とお詫び文を掲出し、当該番組『SCHOOL OF LOCK!』放送でもご報告いたしました。

聴取者の皆さま、応募者の皆さま、出演者の皆さまに多大なるご迷惑とご心配をおかけしましたことを、心よりお詫び申し上げます。また、特別協賛の株式会社マイナビをはじめ、スポンサー各社の皆さまの信頼を損ねる結果となりましたことを、深くお詫び申し上げます。

なお、『閃光ライオット 2026』につきましては、イベント全体の管理体制の見直しを行ったうえで予定どおり開催いたします。今後は、再発防止に努めるとともに、皆さまからの信頼回復に取り組んでまいります。

■特別番組『JFN スペシャル 2026 山下達郎 50 周年記念 Sunday Song Book 増刊号 Supported by Rakuten Card』放送

TOKYO FM をはじめ JFN 全国 38 局ネットでは、5 月 5 日（火・祝）15 時～17 時に『JFN スペシャル 2026 山下達郎 50 周年記念 Sunday Song Book 増刊号 Supported by Rakuten Card』を放送しました。番組では、ソロ活動 50 周年を迎えた山下達郎のこれまでの音楽史をさまざまなエピソードとともに振り返りながら、50 年のキャリアの中で生み出された数々のヒット曲やアルバムの名曲を、リスナーからのリクエストとメッセージとともにお届けしました。また、4 月に開催された SGC ホール



有明の“こけら落としプレミアムシリーズ” 『TATSURO YAMASHITA LIVE at SGC HALL ARIAKE』から、貴重なライブ音源も初オンエアしました。

■ 『TOKYO FM / BS11 presents 昭和 100 周年記念 昭和ゴールデン HITS 100 in Orchestra～宝塚レジェンドスターたちが歌う昭和の名曲！～』開催

2026年5月30日(土)日本武道館にて『TOKYO FM / BS11 presents 昭和 100 周年記念 昭和ゴールデン HITS 100 in Orchestra ～宝塚レジェンドスターたちが歌う昭和の名曲！～』を開催いたします。昭和 100 周年を記念し、日本の名曲たちを熱唱。宝塚歌劇団トップ男役 OG レジェンドスターたちと日本が誇るレジェンドシンガーが日本武道館に集う一夜限りのメモリアルコンサートです。

【公演概要】

名称：TOKYO FM/BS11 presents 昭和 100 周年記念 昭和ゴールデン HITS 100 in Orchestra～宝塚レジェンドスターたちが歌う昭和の名曲！～

日時：2026年5月30日(土) 開場 16:00 / 開演 17:00

会場：日本武道館

出演：<宝塚レジェンドスター> 麻実れい、剣幸、涼風真世、一路真輝、  
真琴つばさ、姿月あさと、湖月わたる、彩輝なお、凰稀かなめ、紅ゆずる  
<レジェンドゲスト> 小柳ルミ子  
<MC> 黒木瞳  
<管弦楽> ゴールデン HITS スペシャルオーケストラ



## 議題 2 : 番組視聴

### 『川島明そもそもの話』

2026 年 4 月 11 日 (土) 17:00~17:55 放送

#### 【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、毎週土曜日夕方 5 時から 5 時 55 分に放送中の『川島明そもそもの話』の 4 月 11 日 (土) の放送回です。この番組は、2023 年 10 月にスタート。番組 MC 麒麟・川島明が、毎週各界の著名人をお招きして、意外と知られていないゲストの「そもそもの話」を紐解く番組です。テレビ番組で数々の司会として活躍する川島明が、ラジオではじっくりゲストと 1 対 1 で向き合いながら、生い立ち、その職業の道へ進んだきっかけ、影響を受けた人物・作品、転機となった出来事について伺っていきます。今回ご試聴頂いた 4 月 11 日の放送回は、漫画家・秋本治氏 (73 歳) をゲストにお迎えした回です。デビュー作でありながら、1976 年の連載開始から 2016 年まで 40 年間一度も休むことなく週刊で連載された作品『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の誕生秘話、愛され続けた背景、そして、そもそも漫画家を志した理由についてお話頂きました。

これまでのゲスト : オードリー春日 (芸人)、浦沢直樹 (漫画家)、木村多江 (俳優)、  
松重豊 (俳優)、下野紘 (声優)、高橋成美 (元フィギアスケート)、  
上原ひろみ (音楽家)、増田恵子 (歌手)、BE:FIRST LEO (音楽家)  
他多数 (敬称略)



**【委員の意見および社側説明】**

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○川島明さんの声が本当に良いというのは皆さんご存知の通りですけれども、聞き手として話し手のことをすごく盛り上げてくれる。平坦な感じではなく、前のめりで、それでそれでみたいな感じで、のってきてくれるというのがとても好感が持てる。やっぱり川島さんは、上手いなと思いながら聞かせていただいた。

○秋本治先生の、漫画界の生き字引と言うか、現場をずっと現役でやってらっしゃるところで、先生のすごい人柄の良さや人格者であるみたいな話はいろいろな方面から伺っていたのですが、それが非常に伝わるすごく真摯なお話をしてくださっていた。

○40年間1度も休むことなく週刊で連載をしてきた。この週刊連載というのが凄まじくシビアな状況ですが、それを1回も落とさずやってきたってところが本当に驚愕だと思っていて、そのコツを3つ4つ先生がお答えされてたと思いますが、これが長くペース落とさず、そして質も落とさずに現役で活躍されるポイントというかコツというか、仕事人としてのその内容がすごく詰まった話だった。そういった意味で言うと、単なる漫画家さんの話というよりも、ちょっとビジネスっぽいコツとかポイントが、非常にたくさん引き出されていて、川島さんの話の上手さもあると思うが、職業を持つものとしても参考になった回だった。

○秋本先生が、出版業界の黎明期から今までずっと現場、第一線でやっていらっしゃるので、いろいろな有象無象も見てこられてると思いますし、混沌とした昭和の時代から今までというところで、結構えぐい面白い話が転がってるはずだと思う。なので、そういうちょっと聞くとこちらがゾワゾワするような怖いけど面白いみたいな話が、実は聞くと一番面白かったりするもので、もうちょっと突っ込んで聞けると、さらに漫画のファンの方や、長年、業界や媒体を親しんでらっしゃる方には、また一層、聞き応えがあったというか、より深みが出たものになったのかなと思って、そこがちょっと残念だった。川島さんだったら絶対楽しく拾ってくれると思う。綺麗な話ばかり出てきていたので、有象無象した話をもう少し深入りして聞きたかった。

○この55分というしっかり時間を使ってしっかり話を聞くということは、テレビとかそういうところでは出来ないようなことを、この番組ではやっているのだなと思って、色々興味深く話の内容が聞けた。

○冒頭でダイジェストみたいなものがあったりとか、最後に川島さんのまとめの言葉みたいなものがあったりして、番組の作り方が、YouTubeの番組っぽくしたいの

かなと思った。タイトルの「そもそもの話」というのがすごくいいと思っていて、「そもそもの話」を聞きたいなという思いはすごくあるので、もっと YouTube の教養番組チャンネル的な感じにするのだとしたら、もっとこれをキーワードっぽくして、「そもそもの話その 1 : そもそもなんで漫画家に？」とか「そもそもの話その 2 : そもそもなんでこんな長いタイトル？」とか、「そもそもなんでこんなに長く続けられたの？」みたいに、質問のところにいちいち毎回「そもそも」をしっかりつけるとか、途中途中でサウンドロゴ的に「そもそも」みたいなものが入るとか、「そもそもの話」というすごくいいタイトルをもうちょっとエッジを効かせて、「今日はこれとこれが学べたな」みたいに感じられるようにするっていうのも、あるのかなというか、広告だとしたらそうすると思った。「そもそも」というキャッチフレーズがすごく強いので、それをもうちょっと、うまく生かしてもいいのかなと思った。

○このような著名人が著名人をインタビューするパターンだと、自分を殺せるかどうかということが、すごく難しいと思う。でも、川島さんは自分を殺せる方だと思っていて、多分、キーとなる質問はいくつか用意していたのだと思う。でも、すごく幅広い知識があるからどこに行っても熱意を持って受け止められるし、その裁量の部分、これとこれとこれは面白いところだから聞かないとっていう構成と幅の中で、こっちに行ったらこれは盛り上がるし、こっちに行ったらこれは盛り上がるし、みたいな感じで、その両方を持って出来るというのはすごいと思った。最終的に浮かび上がったのは、そのクリエイティビティと規律性が両立するところだったと思う。漫画家として徹底的にクリエイティブをやらなきゃいけないけど、毎日毎日仕事して続けていかなきゃいけないってことを両立させるというのは、どういうことかというところまでを引き出してるのが、すごいと思った。このレベルの熱意と情熱で毎週の回をやっているんだと思うと、それはなかなか来ないと思った。あれだけ忙しい方がそれだけやってる。ご自身がもちろん好きであると思うが、多分きちんとこれを聞かなきゃという準備をして挑まれてるし、その準備をなるべく見せないようにしてる感じがすごくしたので、そこがいいなと思った。

○最後の「15 歳に戻ったら？」という質問は、初めに考えていた質問だと思うが、ご本人も言いながらもこれは答えが分かっている様な、もう 1 回聞くのかなという様な感じがあったので、あそこは質問を変えて「漫画が好きでしょうがないけど職業として維持する」というドライな部分をもっと気立たせても良かったかなと思った。

○冒頭のところのダイジェストが「YouTube」っぽいと思った。最近結構 YouTube を見ているので、聞き慣れてきているので、この構成は聞きやすかった。このような豪華な組み合わせは他にもなかなかないので、以前も何回か議論になりましたけど、

やっぱり音楽を入れるというのは、番組として絶対なのか、それともどうなのかというところを思った。話してる音量と音楽の音量でちょうどいいボリュームが変わる。話をちゃんと聞こうとすると音量を大きめにしていて、音楽がかかると音量下げなくてはいけない環境で聞いている。YouTube っぽいのに慣れてきているので、音楽無しでも全然聞けてしまうので、そこが少し気になった。ただ、アイデンティティとして音楽を入れ続けるということであれば、それはそうなのかなとも思う。

○「こち亀」は、考えてみたら1回も読んだことない。ただ、1回も読んだことがなくても面白く聞けてしまう55分だった。

○対談番組なのかもしれないが、聞いているとこれは完全にインタビューだった。しかし、そのインタビューしている手法みたいなものが、もの凄く匠なインタビューだと思った。秋本さんは70代で、しかも漫画の世界にのみならず日本で多分知らない人は誰もいない有名人で大御所である。その大御所に対してどうやって質問していくかというのは、なかなか難しいところだと思う。みんなが知ってる存在で。相当に勉強して事前にリサーチしてから臨むと思うが、大抵の場合は、割に腰が引けちゃうケースが多いと思う。この番組での川島さんの質問の仕方は、非常に良くできていた。先生のこと何でも私は知ってますよ。みたいな感じで、もうあなた以上に私の方があなたに詳しいですというぐらい。そういう姿勢で臨んでいて、でもそこはあまり出さずに、いかに喋りやすく秋本先生を持ち上げるかというところずっと話が進んでいた。大御所として持ち上げすぎるのでもなく、かと言ってドライにするのでもなくそのバランスをうまく取った形で、気持ちよく話をさせて、誘導していく、質問内容を。こっちの方に話を持ってたら面白いだろうと思ったらわざとその質問を少し動かして、その話に流れてくように操作するみたいなことを、匠にやられてるということが、この人は本当にすごい人だと感じた。

○秋本さん自体のすごいフレンドリー感というか、大御所感が全然ない感じが良かった。秋本さんの喋りを聞いていても、大御所感がなく、なんだか自分の好きなこと好きなだけやっているだけですというところがすごく好感を持って、それが川島さんのインタビュー術とうまくマッチしていて、非常に奇跡的にいい感じのトーク番組になっていると感じた。

○17時以降は仕事しないとか、きちんと時間を区切って仕事するということは、21世紀的というか、昭和の頃は、文化人はすべからく、もう少し破滅的な人生を歩まないといけないというなんだか抑圧みたいなものが結構あった。それが、今世紀に入ってからだんだんそれ違うでしょという風に言われるようになってきて、みんな健康に気を使って、仕事の時間もきっちり分けて、ライフワークバランスを取ってという風に変わってくる。昔はなんだかそういうことするとクリエイティが消滅するというように思い込まれていたが、実はそんなことはなかった。今やそ

んなイメージを物書きや漫画家に求めている人も誰もいなくなっていて、そういう意味で言うと、秋本さんの長い 40 年間も漫画を続けられているその背景には、古い時代の抑圧から解き放たれて、いかに持続をしていくかということをも自分の中のポリシーとして独自に持っていらっしやったという、その哲学があったのだということをもすごく感じて、大変好感を持てる内容だった。

■貴重なご意見ありがとうございました。働き方など盛り込んでいるのが、ただのインタビュー番組で終わらない素晴らしさかなと思いますので、制作スタッフに伝えておきます。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

- ① 放送:番組「TOKYO FM Navi」5月31日(日) 5:55~6:00 放送
- ② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き
- ③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>